

風姿花伝第一、年來稽古条々

五十有余

この頃よりは、大方、不為
ならでは、手立てあるまじ。
麒麟も老ては土馬に劣ると
申事あり。さりながら、
真に得たらん能者ならば、
物数は皆々失せて、善悪見
所は少なしとも、花は残る

(口訳)

此の頃からは、先づ大体、「せぬ」といふ方針をとる以外に手段もないやうである。諺に「麒麟も老ては駒馬に劣る」といふ語があるが、正に其通りだ。しかし、真に得法した名人ならば、今まで花をさせた曲は皆演じ難くなり、善いにつけ悪いにつけ、見どころは少くなつてしまつても、花といふ妙趣だけは残るものである。我が亡父は、五十二歳の五月十九日に死去せられたが、その月の四日に、駿河国浅間神社の御前で法楽能を演じ、しかもその日の猿樂は殊に花やかで、見物人

べし。忘父にて候し物は、

ばうふ

上下こぞつて賞讃したことであつた。

その頃は、花を咲かせるやうな能はも

五十二と申し五月十九日に死去せしが、その月の四日

まうし

の日、駿河の国浅間の御前にて、法樂仕

するがせんげむ

つかまつり

その日の猿樂、殊に花やかにて、見

物の上下、一同に褒美せし

なり。凡其の頃、物數をば、

早今^{はや}の初心に譲りて、安^{やす}き

所を少^{すく}な少^{すく}なと、色^{いろ}ひて為^せ

しかども、花は弥^{いや}増^ましに見えし也。これ真に得たりし

花なるが故^{ゆえ}に、能も枝葉も

少なく老木になるまで、花

うすべて初心の者にゆづり、自身は安い所を色香も控へ目控へ目にと演ぜられたのだが、その美しさは又一段と立派なものであつた。これは、眞に悟得せられた花であつたから、能は枝葉も少くなり老木になるまでも、花は散らないで残つたのである。これ事実老骨に花が残つた証拠である。

は散らで残しなり。これ、

目前まのあたり、老骨こつに残りし花の証

拠なり。

年来稽古、以上

〔評〕

五十有余といつた所を、最後のものとしたのは、観阿弥を標準としていつたものであらう。勿論五十余で引退するといふのは、今日の考か

らでは早きに過ぎる。これは室町初期、能楽の草創期を以て考へてやらねばならない。しかし、実際に、世阿弥の晩年時代には、芸の進歩と、鑑賞眼の進歩とで、六十歳以上の芸を賞翫するところまで行つて居り、音阿弥などは、特に老後の芸能のすぐれてゐることを以て賞せられて居る（蔭涼軒日録に詳しい）。これは、年齢の制限を、芸の力で克服したものであつて、七十歳位までは益々光つてゆくといふのが、名人の持味であると思ふ。